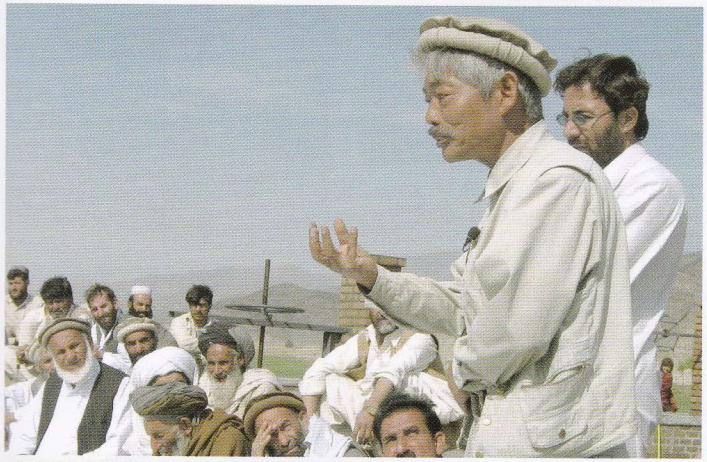
ペシャワール会
PMS（平和医療団・日本）



ペシャワール会事務局

〒810-0023　福岡市中央区警固2-1-17 ハイツみかげ803号
電　　話　092-731-2372
F　A　X　092-731-2373
e メール　peshawar@kkh.biglobe.ne.jp
ホームページ　http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/
【会長】村上　優　　【現地代表】中村　哲

ペシャワール会は1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、現在はアフガニスタンでの、医療活動、灌漑水利事業等、総合的農村復興事業を支援しています。

●灌漑・水利事業

2003年3月、マルワリード灌漑用水路建設計画開始。

比較的水量豊富なクナール河水系から取水し、 2010年3月、最終地点ガンベリ沙漠まで、貯水池13ヵ所を備えた25.5kmが開通。 一日送水量約30～40万㎥、灌漑面積3,000ha。

工事には、日本の伝統工法が多用された。用水路では蛇籠工・柳枝工を採用。特に重要な取水部では、斜め堰方式を採用、堰板方式水門・沈砂池・土砂吐き・石出し水制と共に、一連の「洪水と渇水に耐える取水システム」が確立された。

この取水システムは、2010年8月以来頻発する大洪水を経て、護岸技術と共に完成度が高くなった。この結果、近隣郡の灌漑水路の再生が可能となって多くの地域が守られ、その有用性が実証された。更に改良を加えながら次々と各地に建設されている。

困難であった安定灌漑を実現し、合計16,500haの耕地の安定、65万人の農民の生活を護る「地域復興モデル」を目指している。

また、用水路沿いに約50万本、砂防林に約20万本の植樹が行われ、河川堤防沿いを加えると、75万本を超える。

マルワリード用水路は、保全の段階に入り、地域住民による維持管理体制作りを継続中である。

＜自立定着村＞
試験農場用地として、用水路最終地点のガンベリ沙漠に180ha開墾中。
水利事業に携った農民や職員が自活しながらその経験を生かし、用水路の維持・管理を世代から世代へ繋げていくという構想。既に10年以上の作業経験で熟練した集団は、今後東部アフガニスタンに於いて重きをなすと期待される。

《ガンベリ沙漠横断水路》

水路掘削前　A

灼熱沙漠、必死の作業が続く

通水後３年経過（Ａと同地）

砂嵐で埋まった試験農場の給・排水路

●農業事業

2002年、「自給自足の農村回復」を掲げ、試験農場をダラヌール渓谷に開設したが、将来を考え2009年、用水路最終地点のガンベリ沙漠に移した。

全180haのうち、現在約45haを開墾し、穀類、芋、野菜の他果樹園ではザクロ、ミカン、桃等果樹2万本が育っており、近い将来出荷も見込まれている。畜産も可能となり、徐々に拡大していく計画。

かつて100%近い食糧自給を誇っていたアフガニスタンは、現在半分以下に自給率が落ちたと言われる。
農業復興のモデルを示す意義は少なくない。

ペシャワール会
PMS（平和医療団・日本）　のあゆみ

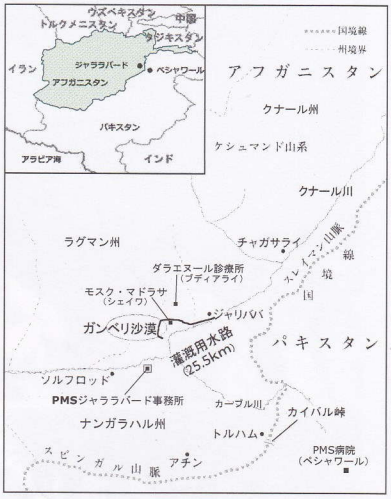
－誰もが押し寄せる所なら誰かが行く
誰も行かない所でこそ、我々は必要とされる－　中村　哲

1984年、中村医師はパキスタンのペシャワール・ミッション病院ハンセン病棟に赴任し、医療事情が不十分な環境の下、診療活動に従事。

1986年より同国内のアフガニスタン難民への診療を本格的に開始。
1991年には、アフガニスタンのダラエヌールに最初の診療所を開設し、以来両国に跨り無医地区での医療活動を開始。

1993年、ダラエヌール周辺で悪性マラリアが大流行した折には、日本国内での緊急募金を呼びかけた。これで治療薬の購入ができ、2万人以上の治療が行われた。

PMS活動地域



1998年、ペシャワールにパキスタン・アフガニスタン両国の恒久的な拠点となる『PMS基地病院』を建設。

PMS基地病院

1970年代から悪化の一途を辿る旱魃は、2000年夏、アフガニスタン全土で一挙に深刻化した。多くの国民が難民化して流出が止まらず、水不足が原因で赤痢やコレラなどが急増した。
飲み水・農業用水の確保が急務となり、医療活動と並行して水源確保事業を開始。
飲料用井戸約1,600本、灌漑用井戸13本を掘削、カレーズ（伝統的な地下水路）38ヵ所を再生し、多くの村民の難民化を食い止めた。

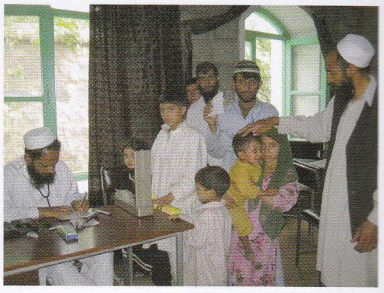
2001年、『アフガンいのちの基金』設立。
旱魃と戦乱により、首都カーブルに集中する国内避難民へ緊急食糧配給を実施。
空爆下にも続行し、2002年2月までに15万人に配給した。
その基金をもとに後述の『緑の大地計画』を実施。

食糧配給

PMSは医療団体だが、今なお進行する大旱魃の中、現在は水利灌漑事業に重きが置かれている。
これは病気の背景に慢性の食糧不足と栄養失調があるからで、沙漠化した農地の回復が急務だと判断されたからである。

医　療　事　業

ペシャワールのPMS基地病院を中心にパキスタン山岳部に2、アフガニスタン東部山岳部に3他、多い時で合計10ヵ所の診療所を設け、ハンセン病、アフガン難民、貧困層の診療に取り組み、定期巡回診療も行った。


ダラエヌール診療所

現地スタッフの育成や女性患者の治療にも力を注ぎ、現地の文化・慣習を尊重して診療に努めたが、2001年からの戦乱の影響で診療所が次々と閉鎖に追い込まれ、現在はダラエヌール1ヵ所を残すのみとなった。

現在、年間診療数は約55,000名。
ハンセン病診療は大きな課題だが、治安悪化などで取り組めないのが実情。戦乱で諸団体が去る中、同診療所は地域で更に重きをなしている。

2009年7月、『PMS基地病院』は、治安悪化で現地に委譲、活動基地をアフガニスタン東部のジャララバードに移した。

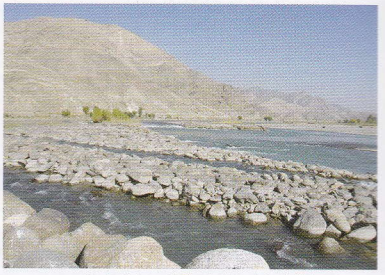
緑の大地計画

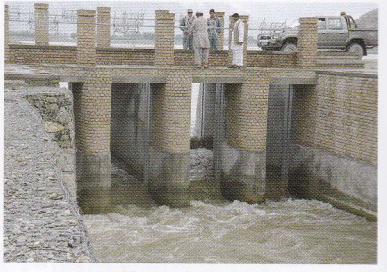
2002年、『緑の大地計画』立案。緊急食料配給実施（2001年）の後、旱魃で荒れた農村の復興を計画。

アフガニスタンは人口の大半が自給自足の農民である。農業生産の回復は、死活問題であり、医療や治安にも係わる。

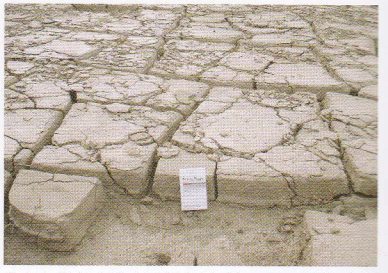
2003年、マルワリード用水路建設を開始（2010年竣工）、更にナンガラハル州北部3郡全体で水利工事を進め耕地を復活・拡大し、多くの難民が戻って来ている。

この経過の中で、地域共同体の精神的な拠り所として「モスク、マドラサ（伝統的な付属教育機関）」、寄宿舎を建設。
現在ではナンガラハル州の中で同地は最も治安の良い地域になっている。


マルワリード取水堰・斜め堰


カマ第2取水門・堰板方式

モスク（イスラム教寺院）


今なお進行する大旱魃、干上がってひび割れた畑

【カラー特集】

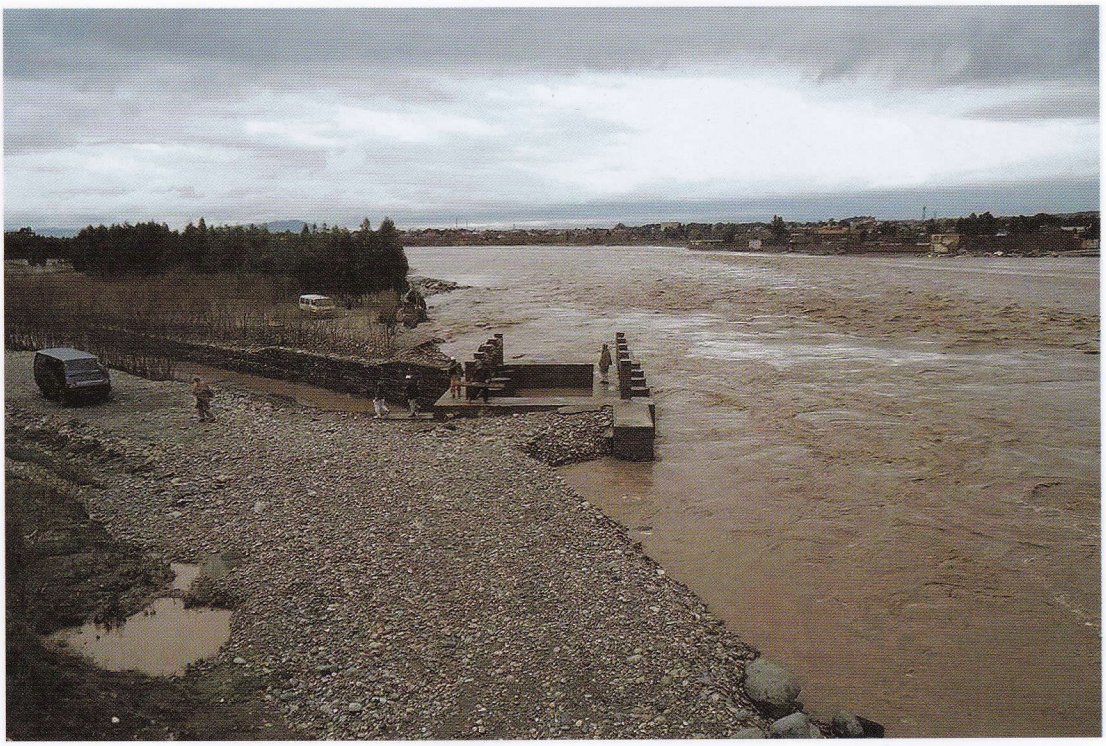
ガンベリ沙漠のPMS農場で初の黒砂糖

干ばつで次第に消滅していった黒砂糖。
「無くなったものが大豊作で戻ってきた」という喜びは例えようがなかった。

PMS農園。ガンベリ沙漠の開墾中（2013年2月）

同上の農場に初めて栽培したサトウキビ（2014年7月）

2月23日夜半から翌24日朝にかけて突然土砂降りとなり、24日夜、カブール河の水位が遂に高さ3mのベスード第一取水門を30cm超えて浸水、門番小屋も破壊。対岸ジャララバード市内も、あちこちで堤防が決壊した



24日夜間に溢水し水門両脇が流失。門番の機転で水門は完全に閉じていた。もし水門がなかったら激流が流れ込みベスード地域全体が冠水する大被害となっていた